

色彩語「あか」の研究

— 赤・紅・茜・丹・朱・緋と red, scarlet, vermilion, crimson —

中津川 ゆ き

1. はじめに

日本語には「あか」という色彩を表現することばが、「赤」や「紅」、「茜」、「丹」、「朱」、「緋」など、多数存在する。このことは、日本語以外の言語にもみられる。英語では「あか」を表現することばとして、“red”をはじめとし“scarlet,” “crimson,” “vermilion”などが存在する。

本論は、日本語と英語の赤系色彩語はどのように使い分けられているかを考察する。まず、それぞれの色彩語の語源や原料、科学的な数値、連想的意味や連語を比較する。さらに、文学では赤系色彩語が何を修飾するのかを、「身体、着物・装身具、もの、抽象概念」の4つのタイプに分類し考察する。

2. 色彩語に関する研究の概要

2.1. 色彩語と色名

『現代言語学辞典』は、色彩語の定義を、以下のように示している。

赤・青・白などの色彩を指す語の総称、color termsともいう。物理的には全く同一の色彩スペクトルであっても、言語によって区切り方が違うことがある。そのため、異なる言語を話す民族の色彩認識構造は異なるものではないかということで、言語の相対性 (LINGUISTIC RELATIVITY)・類型 (TYPOLOGY)・普遍性 (UNIVERSALITY)などを論じる時に、色彩語彙はしばしば引用されてきた。

(『現代言語学辞典』 p.98)

Berlin and Kay (1969)によると、以下のように、色彩語には言語を問わず共通する

普遍的な基本色彩語 (basic color terms) がある。彼らの研究は、世界 98 言語の 328 の色を対象とし、単純語であることや、使用頻度が高く一般的であること、物質名の転用語でないことなどの条件を満たしたものを基本色彩語として、11 語存在すると論じている。全ての言語が 11 語持つわけではなく、最小 2 語、最多は 11 語で、基本色彩語の数の増加には、図 1 に示した普遍的な 7 つの進化過程があるとしている。

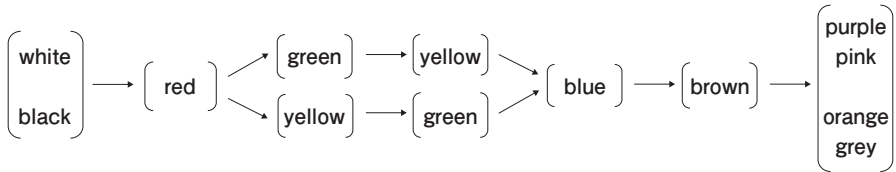


図 1 基本色彩語の進化段階

Berlin and Kay (1969) を参考に作成

福田 (2006) は、その意味や語源が分かりにくい基本色彩語とは対照的に意味や語の由来がはっきりしている「色名」には、二次的色彩語としての色名、色彩技術に関する色名、文学的色名、商業的色名の 4 タイプがあるとしている。二次的色彩語としての色名は、空色やスカイブルーのように、表現したい色彩の特徴を持つ誰もが知る事物の名前を借用して表すものである。色彩技術に関する色名は、色を生み出すために使用する染料や顔料などの着色材料の名前を借りたもので、藍やインディゴが当てはまる。文学的色名は、平安朝文学の中に出現するような、季節の草花や自然の風物からとられた色名で、二次的色彩語との違いは、自然界の事物を、美化したり情緒的表現として用いたりしている点である。女官の服装の配色を表す「かさね いろめ」も該当し、これらは、日本の伝統色の基盤となった。商業的色名は、近世、近代に生まれた流行色などの色名で、色辞典の 8 割以上は商業的色名である。

2.2. 小説の色彩表現に関する研究

上村 (1999) では、芥川龍之介作品の色彩表現の研究が取り上げられている。この研究は、小説 149 編のテキストデータを利用し、文学作品から色彩表現を抽出し、数量的に分析するもので、分析した色彩語は、「白」、「黒」、「赤」、「青」、「黄」、「紫」、「緑」である。上村は、芥川龍之介の小説を分析対象とした理由を 2 点挙げている。小説は、筋に不必要な描写は行わないという特徴から、色彩表現の使用には意味があると捉えた

こと、芥川龍之介は無駄な修飾語を用いない作家であるため、彼の色彩表現には必ず意味があると考察したことの2点である。

上村(1999)は、以下の基準で色彩表現を抽出している。まず、「血は赤」といった連想語彙は除外し、さらに、次の2つのタイプを除外した。1つは、表現形式を変えると指示物が異なる場合で、例えば「白鳥」は「カモ目カモ科の水鳥」であるが、この語を「連体修飾用法」に置き換えると「白い鳥」になり、全身が白ければ白鳥だけでなく文鳥にも当てはまる。したがって「白鳥」の「白」は状況を記述する「白(しろ)」と同等には扱わない。除外した2つめは、色彩を感じることができないノイズであり、その例として「告白」が挙げられる。この結果、色彩を感じることができて、他の機能に置き換えても同一のものを指示するもののみを分析対象にしている。

この基準で抽出した色彩表現の分析方法として、上村は2つの分類方法を採用している。1点目は、色彩表現の「機能」による分類で、「名詞的用法」「動詞的用法」「副詞的用法」「形容詞的用法」が挙げられている。2点目は、色彩表現が当てはめられる「対象」による分類で、「身体」「着物・装身具」「自然物」「人工物」「心理・象徴」の5つに分類している。

2.3. 短歌と俳句の色彩表現に関する研究

近江(2008)は、現代短歌と俳句の季語に用いられている色彩語を計量分析した。歌人や俳人はことばの専門家であり、自然観察に長けているという点から、短歌と俳句を分析対象としている。この研究では、『現代短歌全集 第17巻』に掲載されている短歌9065首と『日本大歳時記 座右版』にある約17200強の季語を用いている。色彩語の抽出基準は、JISの『物体色の色名』で採録されている265語であるかと、色名辞典が採用している語であるかである。また、茜色など、語尾の「色」の加除については、文脈から見て色を指しているか否かで判断している。

近江(2008)の色彩語分析により、本論文に関わる点が2点明らかにされている。まず、短歌では8種類の赤系の色彩語が用いられていた。頻度の高い順に挙げると、赤(125)、紅(122)、朱(45)、茜(31)、緋(20)、丹(4)、その他(3)である。このように、赤系の色彩語の語彙は分化している。また、同じ赤系統の表現でも、単純に「赤」を使う歌人と、朱・緋・茜・紅を使い分けて使う歌人がいることがわかった。後者は、「赤」を用いることが少ないことも明らかになっている。

次に、俳句の赤系色彩語として、赤(50)、紅(23)が用いられており、紅は、秋を

表す季語の代表格であった。このように、俳句では赤系色彩語は赤と紅に分化している。この理由について、日本の自然環境の色は限定的であったり、基本色彩語理論では暖色系の色は細分化が見られたりするからだとし唆している。

3. 日本語の色彩語「あか」—赤・紅・茜・丹・朱・緋

3.1. 語の起源

基本色彩語である赤の語源を、『日本語大辞典』は、次のように説明している。古代日本語には、「赤（アカ）・青（アヲ）・白（シロ）・黒（クロ）」の4語があり、それらは、光の感覚を表す語「明（アカ）・青白（アワ）・顕（シラ）・暗（クラ）」から変化したものである。光の感覚を表す語は原初形態の第二音節の母音が「ア」であったが、色名に変化させるにあたり、「オ」に交替したと推測される。しかし、「赤（あか）」は例外で、当時の日本語では「ア+コ」という音節の連続が不可能であったため、「アカ」ということばは、「明」と「赤」という両方の意味を持つことになった。図2にあるように、光の感覚を表すのにあたり、赤は中心に位置づけられたとされる。



図2 日本語の色彩語の発達過程

佐藤・前田（2014）を参考に作成

紅の語源について、『日本国語大辞典』では、多数の説を提唱している。これらの説は大きく2つに分類できる。1つ目は、藍に関係しているという立場だ。クレノアキ（呉藍）の約で、呉国から渡来した藍という意であると考えられている。2つ目は、太陽に関係するものだ。クレアキ（黄昏天居）の義や、暮方の日は格別赤いものであるところからクレノヒ（暮日）の義であるという。紅の読み方であるが、『日本史色彩事典』によると、古くから「くれない」と読み、近世から色名として「べに」と呼ぶようになった。茜の語源は、『日本国語大辞典』で、アカネ（赤根）やアカニ（赤丹）の義であるとしている。『日本国語大辞典』によると、丹の語源説は複数ある。「熱いものは赤

いところから、ネチ（熱）の反」や、「アカニ（赤土）から」、「朝日がニイと出た色は赤いところから」というものである。朱について、『新選漢和辞典』では、「朱」という漢字の成立を「指事。木の中に一がある形。一は木の赤い芯を表す。朱は木の一種で、松や柏のなかまでであるが、しんが赤い色なので、もっぱら色の名前に使うようになった。」としている。緋には、紅のように、複数の読み方がある。『日本史色彩事典』は、日や火の色を指す「あか」と同意語の「あけ」があるという。平安時代中期ごろから、「ひ」と呼ばれるようになったと述べている。また、『日本史色彩事典』は、万葉集の成立した上代の色彩語として、赤や紅、茜色、丹、朱（そほ）を挙げているが、緋はない。このことから、本論で取り上げる赤系色彩語の中で、最も新しい語であると考察する。

赤系色彩語の語源を比較して、明らかなことが2点ある。1点目は、「赤」という色が日本語の色彩語の根幹をなしているということである。「赤」という色が日本語の最古の色彩語の1つということもあるが、「茜」や「丹」の語源に着目すると赤い根や赤い土と、「赤」ということばから生まれた色彩語である。2点目は、日本語の赤系色彩語は、太陽などの光を語源としている例が多い。光の感覚から派生した「赤」をはじめ、暮日が語源の「紅」、朝日が語源の「丹」がある。また、「あかあかと日はつれなくも秋の風」という松尾芭蕉の俳句では、日の光を「あか」という色で表現している。色とは光のことであるが、太陽など光というものを色名に反映させることは、日本語の色彩語の特徴といえるだろう。

3.2. 色の原料

『日本史色彩事典』は、赤・紅・茜・丹・朱・緋の6つの色彩語の原料を、以下のよう

に説明している。赤色は、マメ科の蘇芳と明礬を原料として染められていた。赤色が指す色相は黄味を帯びたものから青味を帯びたものまで幅広いが、上記の用法で染められた色は青みを帯びた赤であると推測されている。紅花で染めた色は、紅色である。染めるときに用いる紅花の量に応じて呼び名が異なり、紅花のみのものを本紅、中程度の濃さのものを中紅と呼んだ。茜とはその名の通り、アカネ科である蔓生の多年生植物の根を採取し、乾燥したものをういて染めた色である。鉛丹と呼ばれる四酸化三鉛（ Pb_3O_4 ）で染められた色が、丹色である。一方、太古の時代の丹色は、堅牢な鉛丹ではなく赤土が用いられていた。朱とは硫化第二水銀（ HgS ）を主成分とする鉱物性赤色顔料で染められた色のことである。緋は、茜と灰汁で染めた色である。平安時代中期に

なると、茜の代わりに、黄味を帯びた支子（クチナシ）と赤味のある蘇芳を重ねて染められるようになった。

上記の通り、赤・紅・丹・朱は原料がそれぞれ異なり、茜と緋は原料が同じであるが、時代を経るにつれて緋の原料が変化し、色味が異なっていたことが分かる。原料にも、赤や紅、茜、緋のような植物性と、丹と朱という鉱物性の2種類に分類することが可能である。

3.3. JISにおける定義

本節では、日英語の紫に類する色彩語を分析した山口（2009）に倣って、赤系色彩語をJISという科学的な視点から考察する。

JISを管理している日本産業標準調査会では、物体色の色名として、あらゆる色を系統的に分類して表現できるようにした「系統色名」と、慣用的な呼び方で表した「慣用色名」の2種類を使っている。系統色名は、基本色名と明度や彩度、色相を示す修飾語を合わせたものである。たとえば、朱色の系統色名は、「あざやかな黄味の赤」であるが、「あざやか」は明度や彩度を表す修飾語、「黄味の」は色相を示す修飾語、「赤」は基本色名である。なお、色相を示す修飾語は色に応じて相互関係があり、基本色名「赤」に用いられるのは「黄み」と「紫み」である。対して、慣用色名は紅色や朱色など、一般的に用いられている色名である。この慣用色名が動植物や物質の名称、固有名詞などと紛らわしい場合、色名の末尾に「色」を付けて「いろ」と読むことを推奨しており、他の名称と混同しない場合は、色名末尾の「色」を省略可としている。

なお、色彩語を色名ではなく、数値によって表示することができる。色は、「色相(H)」「明度(V)」、「彩度(C)」の3つの要素から成り立つので、この3属性を数値で表示することによって色を確定することができる。色相(H)は、色相環を色相知覚の差がほぼ等歩度になるように分割し、色相環にある色名の記号及びその前に付けた数字で表す(図3を参照)。明度(V)は、無彩色を基準に、理想的な黒を0、理想的な白を10とし、その間の明度知覚の差がほぼ等歩度になるように分割し、その数字で示す。彩度(C)は、彩度知覚の差がほぼ等歩度になるように分割し数字で表すものであり、無彩色を0とし、彩度の度合いが増すにつれ、1, 2, 3, 4, ……となる(図4を参照)。三属性による表示では、上記にある3つの数値を、 HV/C の形式で表記する。例を示すと、朱色の三属性による表示は「6R 5.5/14」である。これは、色相が6R、明度が5.5、彩度が14であることを示している。

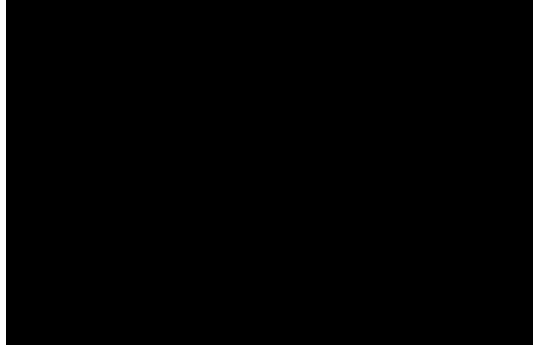


図3 色相環の分割

DIC カラーデザイン株式会社の HP から引用

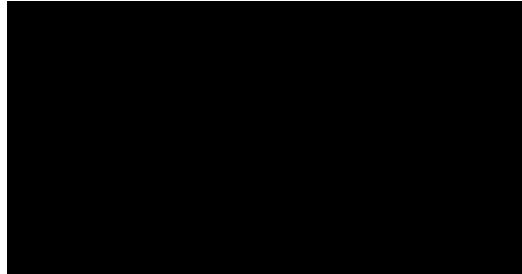


図4 明度および彩度の配列

DIC カラーデザイン株式会社の HP から引用 [例1]

以上をふまえ、JISで掲載されている表を参考に、本論でとりあげている赤系色彩語を表1、表2にまとめた。ただ、JISでは、緋色と丹色は掲載されておらず、系統色名と数値が不明であった。そこで、系統色名は空欄とし、数値に関しては、福田（2006）に記載されているJISと同じ表示方法で記した色名の数値を参考に表を作成した。

表1 有彩色の基本色名

基本色名	対応英語	略語
赤	red	R

JISZ8102「物体色の色名」を参考に作成

表2 慣用色名

慣用色名	対応する系統色名による色名	代表的な三属性による表示	対応英語
紅色	あざやかな赤	3R 4/14	
茜色	こい赤	4R 3.5/11	madder red
朱色	あざやかな黄みの赤	6R 5.5/14	vermilion
緋色		7.5R 4.5/11	
丹色		10R 5.5/10	

JISZ8102「物体色の色名」と福田（2006）を参考に作成

3.4. 内包・連想的意味 (connotation)

『現代言語学辞典』は、connotation を以下のように説明している。

1. 言外の意味. リーチ (G. Leech) のいう連想的意味 (ASSOCIATIVE MEANING) の一つ. 内包的意味 (connotational / connotative meaning) にあたる. 例えば、「家族」という語にとって「暖かさ・愛情・安らぎ」など、「金魚」とよっての「赤い」など. (後略)

(『現代言語学辞典』 p.120)

色彩語にもコノテーションがある。この節では、それらを挙げていく。

文化人類学者の Turner (2004) は、赤が持つ象徴的な意味を、白、黒、赤という三色の関係性からも考察している。アフリカのいくつかの民族では、赤と白を、「男と女」や「生と死」という反対の概念を示す際に、対義的に用いる。他方、黒と用いるときは、白と赤は同義的な意味をなす。したがって、赤は両義的 (アンビバレント) であると考察している。福田 (1999) も、源氏と平家の紅白や、フランス文学であるスタンダールの『赤と黒』のように、赤は白と黒に反義的に用いることがあると指摘している。

福田 (1999) は、赤の内包された意味を、太陽や火、血を連想するものであり、感情面では、暖色や興奮色であると主張している。また、福田 (2006) は、赤が、「赤の他人」や「真っ赤な嘘」、「赤恥をかく」など、赤い色とは関係のない慣用語を持っていることを挙げ、これらは、明らかに他人、明らかな嘘、人前で恥をかくという意味だが、赤の語源である「明 (あか)」と関係があると述べている。

紅という色のコノテーションは、色の原料や歴史が大きく関わっている。福田

(1999) は、紅という色に、密やかな願望とそれと裏腹な逡巡な感情、さらに万葉集には秘められた恋という意味が込められていると述べている。これは、7世紀以降の集権国家体制では、色によって官位身分の貴賤を分けていたため色彩に制限があったが、紅色の規制は特に厳しかったことに由来する。さらに、平安朝では、紅花の染料が高価だったため、紅染の禁制が発せられたほどである。その結果、紅は人々の憧れになり、枕草子や源氏物語などが記された平安後期に、愛好熱は絶頂に達したと主張している。

朱には、その色を用いた人々の行動から生まれた連想的意味がある。『デジタル大辞泉』では、朱(しゅ)の定義の5に「朱墨で歌や俳句などに点をつけたり、添削した書き入れ」としている。『角川古語大辞典』では、墨書のもの訂正・書き入れ用や特に際立たせる必要のある部分を示すために朱墨が使われていたと記載されており、人々の習慣から書き入れ、添削という意味が発生したと考えられる。

福田(2006)によると、緋色は、10世紀の法典「延喜式」において紫に次ぐ高位の色であった。また、以下のようなコノテーションを持つと述べている。

平安時代、緋色を「思いの色」と呼ぶことがあった、当時は思いを「思ひ」と書いたので、思ひの「ひ」から火が連想され、さらに緋につながって、熱き思いを緋色で表すようになったとのこと。

(福田 2006 p.43)

加えて、コノテーションは、社会的・文化的背景に影響を受けている。風見(1997)は、赤、紅、朱、緋という色の社会的・文化的背景を、美的好感目的に使うものと識別や分類に使うものを例に挙げながら説明している。以下に風見(1997)の説明をまとめる。

美的好感目的に用いられるものとしては、歌詞の中の色がある。特に、童謡は、深く根差した日本の風俗習慣や日本人の性向を投影している。童謡『赤い靴』や『春よ来い』、『雨』の歌詞を聞くと、多くの人は、赤い履物は女の子のものであると連想する。さらに、女子の晴れ着や巫女、歌舞伎に登場する女性の衣装は赤である。以上のことから、日本では、女子が身に付けるものは赤という固定観念が確立されていることがわかる。緋という色もまた、女性を連想させる。鯉のぼりの中くらいの大きさの赤い鯉は緋鯉といい、おかあさん鯉である。紅も女を連想させることばであり、多くの男性の中にただ一人の女性がいる状況を「紅一点」と表現する。他方では、紅という色は白という

色彩語と合わせて「紅白」と用いることで、慶事の象徴色になる。

色を識別や分類に使うものには「朱」がある。公文書の押印は、将軍が朱印、他は黒印とはっきり区別されていた。朱印船も将軍が許可した船という意味である。一方、神橋や鳥居は朱塗である。これは、神域への入り口であるが、一般人にとっては、観光のシンボルでもある。このように、日本人は赤い物に親しみを感じている。

さらに、日本語の赤系色彩語が持つ連想的な意味は、中国の思想も反映されている。吉岡（2000）は、五行思想と色彩の関係を以下のように取り上げている。五行思想とは、古代中国の思想で、地球上の基本的な構成の五元素を木、火、土、金、水としている。この五元素はそれぞれ色を持ち、順に、青、赤、黄、白、黒である。五行は、方位や季節にもあてられ、その地には珍獣がいるとされていた。赤という色を持つ火には、南という方角と夏という季節があてられた。また、その季節を朱夏と呼び、朱雀が棲んでいるとしている。この五行思想は5世紀頃日本でも広がり、冠位十二階でも取り入れられている。

3.5. 連語 (collocation)

『現代言語学辞典』(p.96)では、連語 (collocation) を、「広義的には、文法的・意味的に関連する二語 (以上) が結合して形成する語群を指す」としている。しかし、その定義が複雑であることは、以下から明らかである。

(前略) しかし一般的には、単に統語上許されるだけでなく、慣用的に結合がある程度固定されている語群、時に結合全体が特定の意味を表すような語群を連語と呼んで、通常統語的な語の連続と区別する。どこまでを連語とし、どこから通常の語の連続とするかは人によって異なる。一つの基準として繰り返して用いられることが多い語結合を挙げることができよう。ただし、慣用句 (IDIOM) ほど固定化はしていない。

(『現代言語学辞典』 pp.96-97)

赤系色彩語の連語について、『研究社日本語コロケーション辞典』は以下のように述べている。

あかい【赤い・紅い・朱い】①赤い（色、色彩、色調、服、唇、エナメル、紙、旗、リボン、ネオン、光、ランプ、ポスト、鳥居、絨毯、ルビー、花、バラ、サルビア、カンナ、実、イチゴ、リンゴ、ザクロ、唐辛子、血、鬼）②赤い（火、炎、太陽、夕日、星、空、灯、紅葉、楓、ほおづき、人參、柿、肉、ゆでエビ、ワイン、身、髪、舌、煉瓦、鉄鑄、砂、土、山肌、大地）③赤い（顔、顔色、頬、耳、耳たぶ、鼻先、目、喉、患部、発疹、かさぶた）④赤い（思想）⑤赤い（塗る、色づく、彩る、染まる、熟す、熟れる、変わる、汚れる、錆びる、燃える、焼ける、光る、点滅する、照らす、腫れる、ただれる、充血する、火照る、上気する、目を泣き腫らす）

《慣用句》女性組合員が会社前で赤い気焔を上げている（＝女性が意気盛んだ）／彼とは赤い糸（＝結婚する運命）で結ばれている

《合成語》夕日の赤さ／顔に赤みがさす／赤っぽい茶色／赤々と燃える火／赤ら顔の男／赤ちゃん／赤子／赤毛／赤帽／赤出汁／赤身／赤ワイン／赤潮／赤錆／赤土／赤狩り／赤紙／赤字／赤信号／赤点／赤とんぼ／赤線／赤茶色／赤裸／赤恥・赤っ恥／赤黒い血／真っ赤な嘘







（『研究社日本語コロケーション辞典』pp.9-10）

以上のように、『研究社日本語コロケーション辞典』からは、「あかい」が人間の身体や、人が身に付けるもの、自然物や人工物に結合すること、さらに、思想などの抽象概念を示すこともできることが明らかになった。しかし、赤・朱・紅がどのように、使い分けられているかは記載されていなかった。茜や丹、緋についても取り上げられていなかったため、どのような連語があるかは確認できなかった。

3.6. まとめ

この節では、語の起源や色の原料、JISによる科学的な数値、内包・連想的意味（connotation）、連語（collocation）の5つの観点から、日本語の赤系色彩語を分析した。その中でも、JISの三属性における数値と系統色名、色の原料、そして色見本を、表3にまとめた。

表3 日本語の赤系色彩語

赤	紅	茜	丹	朱	緋
					
R	3R 4/14	4R 3.5/11	10R 5.5/10	6R 5.5/14	7.5R 4.5/11
	あざやかな赤	こい赤		あざやかな 黄みの赤	
蘇芳 (植物性)	紅花 (植物性)	茜 (植物性)	四酸化三鉛 (鉱物性)	硫化第二水銀 (鉱物性)	支子と蘇芳 (植物性)

色見本は「原色大辞典」を参考に作成

日本語の赤系色彩語は、基本色彩語である「赤」が中心となっている。その上で、原料ごとにそれぞれ色名が与えられ、多様な赤系色彩語が発生したと考察する。すなわち、紅や茜、丹、朱、緋は、福田（2006）が示す色名4タイプの「色彩技術に関する色名」に該当する。また、基本色彩語の「赤」の語源が光の明暗であった通り、日本語は、太陽など光というものを色名に反映させる傾向がある。この点は、英語色彩語とは異なる。

なお、『漢字の使い分けときあかし辞典』は、「あか」の漢字表記の使い分けに関して概略次のように解説している。赤系色彩語を漢字表記する際は、「赤」を用いるのが基本であるが、「あか」と訓読みする漢字は他にもあるため、表現したい内容に使い分ける。「紅」は、比較的によく使われる漢字で、衣服や化粧などと関係性があるという。華やかさやあでやかさを強調したいときに使用すると効果が高く、女性と関連して使用されることも多い。他方、黄味があった「あか」を指す場合、特殊な読み方ではあるが、「朱」を「あか」として用いることができる。最後に、本論では扱っていないが、顔色や茶色味がある場合、「赭」という色を用いることがあるとしている。

さらに、『漢字の使い分けときあかし辞典』では、「紅」と「朱」の特徴を次のように述べている。

「朱筆を入れる」「朱印を押す」など、朱色は何かを目立たせるために使われる。ここから、《紅》がそれ自身の色を強調するのに対して、《朱》は、他のものの色と比べて「あか」を目立たせるはたらきをすることが多い。

そこで、たとえば唇のあでやかさそのものを表現したい場合には、「彼女の紅い

唇がわすれられない」と書くとき霧囲気が出る。肌や歯の白さと比較して唇を描き出したい場合には、「病み上がりの肌に、朱い唇が浮き立って見える」とするのがふさわしい。

(『漢字の使い分けときあかし辞典』p.17)

上記のように、赤系色彩語は原料の違いで使い分けられている。しかし、現在は、科学技術の発展により、植物など当時の原料を用いなくても、染色することができる。この点をふまえると、『漢字の使い分けときあかし辞典』に記されている方法で、赤系色彩語を使い分ける方が適しているのではないか。しかし、『漢字の使い分けときあかし辞典』には、茜や丹、緋がどのように使われるかは言及されていないため、本論の5節で、文学における使用という観点から考察する。

4. 英語の色彩語「あか」— red, scarlet, vermilion, crimson

3節では、日本語における6つの赤系色彩語を取り上げた。英語も日本語と同様に、基本色彩語の red を筆頭に、赤系色彩語が多数存在する。Oxford English Dictionary によると、“A brilliant vivid red colour” の scarlet や、“a bright red” という色味を持つ vermilion、“a deep red colour” である crimson がある。

4.1. 英語色彩語の外史と色見本

英語の赤系色彩語の語源と変遷、意味分化に関する須賀川（1999）の記述を、以下にまとめる。

英語の赤系色彩語の中で、基本色彩語であるのは、red である。この語は、ゲルマン語を含む印欧語に共通のルーツをもち、語源は「血」である。色彩認識が未分化であった古期英語の時代（600～1150年頃）では、赤色を示す語は red のみであり、当時の綴りは read (rēad) であった。しかし、この語は、頻繁に使用されるうちに意味的にも希薄になり、表現性に欠ける語になっていった。また、西洋において、「赤」という色は様々なイメージをもっているため、red 以外の赤系色彩語の必要性が高まった。その後、Norman Conquest によって数多のフランス語が借入され、色彩語も同様であった。中英語期（1150～1500年頃）には、顔料・絵の具から crimson と vermilion、衣装の色から scarlet というフランス語由来の赤系色彩語が使われるようになり、色相の棲み分けができるようになった。これらの語は、使用されているうちに意味分化が完了

し、赤系色彩語として定着した。その一方、顔料である sangwyn という語もフランス語から借入されたが、存在価値が認められず、今日では使用されていない。さらに、近代英語期（1500～1900年）では、赤系の色彩語が一層分化し、紅色である carmine が加わった（図5、6及び表4を参照）。

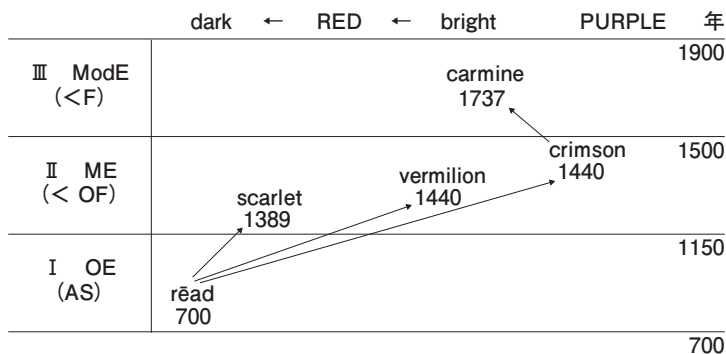


図5 赤系色彩語の段階的発達

須賀川（1999）を参考に作成

表4 中英語赤系色彩語の意味特性

features color names	bright red	color of blood	reddish (of complexion)	dark red
red	+	+	+	-
scarlet	+	+	-	-
crimson	-	+	-	+
vermilion	+	-	-	-

須賀川（1999）を参考に作成

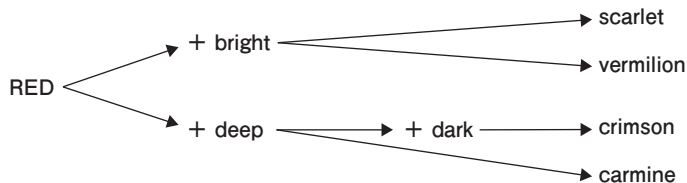


図6 赤系色彩語分化の過程

須賀川（1999）を参考に作成

英語の赤系色彩語の意味特性には、「血の色」という項目がある。これは、red の語源が「血」であるからであろう。確かに、日本語の赤系色彩語も、「あか」の語源が光であるため、赤以外の赤系色彩語の語源も光と関連するものがあつた。このように、語源から見ても、基本色彩語の赤と red は、赤系色彩語体系に大きな影響を与えていると考察する。

次に、英語赤系色彩語の原料についてである。赤系色彩語のコアである red だが、基本色彩語であるため、どのような原料で再現されていたのかは不明である (2.1. を参照)。他方、red 以外の赤系色彩語の原料については、明らかになっている。福田 (2006) によると、scarlet はコチニールという貝殻虫、crimson はケルメスという貝殻虫、vermilion はルネッサンスの頃までは辰砂、それ以降は銀朱を顔料としている。なお、crimson から派生した carmine は、コチニールという貝殻虫を用いている。

英語の赤系色彩語について日本語の赤系色彩語と同様に日本産業標準調査会に示されている系統色名や色の三属性による表示を参考にして、表 5、表 6 を作成した。数値の読み方は、2.3. で記述した通りである。なお、JIS に crimson の系統色名や数値は記載されていないため空欄とし、数値に関しては、丹色や緋色と同様、福田 (2006) の数値を参考にした。

表 5 有彩色の基本色名

基本色名	対応日本語	略語
red	赤	R

JISZ8102「物体色の色名」を参考に作成

表 6 慣用色名

慣用色名	対応する系統色名による色名	代表的な三属性による表示	対応日本語
vermilion	あざやかな黄みの赤	6R 5.5/14	朱色
scarlet	あざやかな黄みの赤	7R 5/14	緋色
crimson		10RP 4/9.5	

JISZ8102「物体色の色名」と福田 (2006) を参考に作成

4. 2. 句レベルの色彩語の使い方 (connotation と collocation)

ここでは、赤系色彩語の connotation を取り上げる。

まず、red から連想される意味を、パストゥロー著、石井・野崎訳（1995）では次のように説明している。赤の象徴的意味は、血と火と結びつき、良い血や悪い血があるように、赤にも良い赤と悪い赤が存在する。キリスト教文化において、良いものとされる血の赤は、生命を与え、汚れを浄化し、魂を聖化する赤である。このことは、イエス・キリストが十字架で流した血の赤に由来する。一方、悪い血の赤は、不純や暴力、罪の象徴、怒りと汚れ、死の赤である。これらは、聖書におけるタブーと関係性がある。遠藤（1971：47）によると、*a red hand*（血だらけの手）；*red eyes*（血走った目）；*a red battle*（血戦）；*red ruin*（戦禍）といった、血を連想させる表現がある。また、赤池（1981）は、カレンダー等で、休日や祝祭日を赤い文字で印刷することから、幸運な日を *a red-letter day* と呼ぶと述べている。

さらに、3.4. で赤は白や黒と組み合わせて使われることがあることを示したが、これは、英国にも当てはまる。風見（1997）によると、15世紀の英国では、王位争奪をめぐって、ばら戦争が起こり、ランカスター家は紅バラ、ヨーク家は白バラを徽章とし、旗に付けて争った。この争いは、両家の和解で終結し、紅と白のバラの両方を取り入れた、チューダーローズなる徽章が作られた。このように、紅白には対立イメージがあったが、現在では友好イメージになっており、日本のようにスポーツでの紅白戦などは行われない。

次に、scarlet のコノテーションについて、取り上げる。赤池（1981）は、西洋、とりわけ英米において、緋色は極悪の罪悪や売春を象徴する色である一方で、地位、身分の高い人の着る衣服の色でもあると述べている。このことをふまえ、女性の軍人への憧れという意味を持つ *scarlet fever* や、極悪の罪を表す *scarlet sin* という表現があると主張している。

他方、vermilion には、red や scarlet のようなコノテーションは見られない。福田（1999）によると、vermilion は、English vermilion を筆頭に、French や Dutch、American 等、民族名がつく色であり、ポピュラーな固有色名である。その一方、vermilion は、東洋の朱色とは色味が異なり、黄味によっている。さらに、vermilion のような赤味のオレンジをさす色名は、*tiger lily* や *carrot orange* など平凡な日常的な対象から命名されていることから、西洋人がこの類の色に特別な執着を持っていなかったと福田は主張している。

crimson の連想的意味は血である。*Oxford English Dictionary* では、crimson には比喩表現として、血と関係しており、「血みどろ」や「血で真っ赤になる」という意味が

あると記載している。

赤系色彩語のコロケーションについて、*Oxford Collocations Dictionary for Students of English* では、以下にまとめるような記載がある。






第1に、red を色そのものとして表現する時は、動詞の glow, go, turn, paint something、副詞の really, very, completely, slightly そして、形容詞の bright, brilliant, fiery, flaming, vibrant, vivid, dark, deep, rich, light, pale, dull, blood, brick, cherry, fire-engine, ruby に共起する。また、肌や目に関する表現である red and blotchy、目に関する表現の red and puffy、体の傷跡に関する表現 red and swollen (= of injured part of body) が慣用句として用いられている。顔色を表すために用いる red は、動詞の be, look, become, flush, get, go, grow, turn、副詞の very, quite, rather, slightly、形容詞の bright, fiery、そして、前置詞の with と共起する。なお、as red as a beet や red in the face という表現も、慣用的に用いられる。第2に、scarlet は、色として用いるとき、形容詞の bright, brilliant, vivid と共起する。一方、顔色に関して表現している場合は、動詞の be, blush, flush, go, turn や、形容詞の bright、前置詞の with と共に用いる。第3に、crimson は、色として使用する場合、形容詞の dark, deep, rich と共起する。他方、顔色を示す crimson では、動詞の be, blush, flush, go, turn や、形容詞の bright, deep、前置詞の with と共起する。なお、*Oxford Collocations Dictionary for Students of English* では、vermilion についての記載がされていなかった。

英語の赤系色彩語のコロケーションの特徴として、色彩語をその色を指すことばとして用いるか、顔色を指すことばとして用いるかで共起することばが異なる。また、色を表現する際に、共起する形容詞は、red や scarlet, crimson のそれぞれの色で異なる。これは、色彩語の色味に合わせているからだと考えられる。そして、red のみ副詞に共起するなど、scarlet や crimson に比べて、多くの語のコロケーションを持っていた。このことから、数ある英語赤系色彩語の中で、コアとなっているものが、基本色彩語 red であることが伺える。

4.3. まとめ

本節では、英語の赤系色彩語を、語の起源や色の原料、JIS による科学的な数値、内包・連想的意味 (connotation)、連語 (collocation) の5つの観点から、分析した。JIS の3属性における数値と *Oxford English Dictionary* に記載されている色味、色の原料、そして色見本を、表7にまとめる (表3を参照)。

表7 英語の赤系色彩語

red	scarlet	vermilion	crimson	carmine
				
R	7R 5/14	6R 5.5/14	10RP 4/9.5	4R 4/14
	brilliant vivid red	bright red	deep red	a beautiful red
	コチニール (動物性)	銀朱 (鉱物性)	ケルメス (動物性)	コチニール (動物性)

色見本は「原色大辞典」を参考に作成

英語の色彩語は、須賀川（1999）が指摘するように、色の明るさや濃さなどの色調の違いによって赤系色彩語が区別されている。日本語のように、原料の違いによって色名が異なる可能性も考えられるが、本論の分析対象外である、crimson から派生した carmine という赤系色彩語は、コチニールという貝殻虫を用いている。これは、scarlet と同じ原料である。このことをふまえ、英語の赤系色彩語は、日本語のように、原料で区別されているのではなく、色味によって区別されていると考えるべきであろう（4.1.を参照）。

また、英語の赤系色彩語は、「血」を連想させる傾向にある。例を挙げると、red の語源や crimson の連想的意味は血である点だ。太陽など光というものを色名にする傾向がある日本語とは対照的である。このように、赤系色彩語は、言語によって色名の成り立ちや語源など主に連想するものが異なっていることが判明した。

5. 日本文学における色彩語「あか」

この節では、上村（1999）で行われた研究のように、文学作品において、どのように赤系色彩語が用いられているかを分析し考察する。

本論では、現代日本語の代表として、芥川龍之介の作品を取り上げる。芥川龍之介の作品を分析の対象とした理由は、上村（1999）が赤系色彩語の中では、「赤」しか取り上げていないからだ。紅など、基本色彩語でない赤系色彩語も分析する価値があると考えた。

赤系色彩語を通時的な視点から考察するため、古典作品を分析対象として取り入れた。伊原（1994）によると、平安時代は、日本の色の歴史上、最も質の高い色彩が生ま

れた、色彩の黄金時代であった。このことをふまえ、本論では、紫式部『源氏物語』を分析対象とした。

5.1. 分析方法

本論における赤系色彩語の分析方法について述べる。この研究の分析対象は、芥川作品の小説149編と、『源氏物語』全五十四巻である。芥川作品は、国立国語研究所が開発した全文検索システム『ひまわり』を用いた。『ひまわり』は、青空文庫に掲載されている文学作品を検索できるシステムであり、芥川作品も分析することができた。一方、『源氏物語』は、古典総合研究所が運営している「語彙検索」を用いた。この検索機能では、多数の日本の古典作品を扱っているが、本研究では新編日本古典文学全集の『源氏物語』を対象とした。

次に、本研究の色彩表現の分類について述べる。上村（1999）の研究では、文法に焦点を当てた「機能」による分類と、色彩語が修飾しているものを取り上げる「対象」による分類の両方がなされている。しかし、本論では、「対象」による分類のみを取り上げる。なお、上村（1999）の研究では、色彩表現を「身体、着物・装身具、自然物、人工物、心理・象徴」という5つのカテゴリーに分類している。しかし、火やお湯、皮など、自然物と人工物の区別が困難な用例が多数あった。また、心理・象徴のほかにも、雰囲気にも色彩表現が用いられる。このことをふまえ、本論では、色彩表現を「身体、着物・装身具、もの（自然物・人工物）、抽象概念」の4つのカテゴリーに分類した。

最後に、本研究の色彩表現の抽出基準について述べる。上村（1999）の研究では、色彩を感じることに、文法に基づく機能の要素を組み合わせ、抽出基準を作っている（2.2.を参照）。しかし、本論では機能による分析を行っていない一方、上村（1999）の研究では抽出基準が厳しいため分析される色彩表現が少なくなり、コロケーションなどの用法についての考察が不十分になってしまうと考えた。そこで、本論では、下記の通り、独自の基準で色彩語の抽出を行った。

第1に、分析対象を漢字表記に限定した。本論の目的は、色彩語の漢字の使い分けを明らかにすることであるからだ。また、「ひいろ」の場合、「緋色」だけでなく「火色」という同じ読み方をする別の色彩語があるため、区別することが困難と判断したからだ。

第2に、固有名詞は取り扱わない。『現代言語学辞典』では、固有名詞の定義を以下の通り、示している。

名詞 (NOUN) の種類の一つ。同一の部類に属する人・事物の中で特定のものを他と区別するために用いる名詞。典型的な例は人名・地名などである。proper name ともいう。普通名詞 (COMMON NOUN) に対する。

固有名詞は、外界の事象のあるものを唯一固有と見なして、それに特定の名称を与えることによって成立する。

(『現代言語学辞典』 p.531 より引用)

この基準により今回の対象外となった表現は、下記の通りである。まず、人物名では、赤さん、赤垣源藏、陶朱、朱雀水、朱雀院である。次に、地名として、赤穂、赤坂、紅海、朱雀門、朱雀大路が挙げられる。また、植物名として、琉球赤木、赤松、紅木、百日紅があった。なお、文学作品の名前も登場し、「赤と黒」と「赤光」も、分析対象から外れた。

第3に、別の色名や、分析対象と異なる色彩を示す語を分析から除外する。具体例として、赤銅色や褪紅色、深紅、紅梅、紅葉、薄紅梅、花紅葉が挙げられる。紅梅や紅葉は、梅や葉が紅いことを示している用法は分析対象としたが、主に平安時代に用いられた襲の色でもあった紅梅や紅葉は「紅」と色味が異なるため、分析対象外とした。また、『デジタル大辞泉』によると、花紅葉は、「春の桜と秋の紅葉」という意味であり、この語は、紅だけでなく、桜の色彩も示しているため、分析対象から除いた。

第4に、赤系色彩語を用いた語であるが、色彩を示していない表現である。これは、「赤」にあてはまる。『日本語大辞典』では、「あか」ということばは、「明」と「赤」という両方の意味を持つと主張している (3.1. を参照)。赤の他人や赤誠、赤裸という表現があったが、これらは、「明」の意味から成り立つ語であるので、本論では扱わない。

一方、「赤子・赤児」と「赤帽」は、色彩をあまり感じられないが、対象とした。これらの語を『デジタル大辞泉』で引くと、「赤子・赤児」とは、「(からだが赤味を帯びているところから) 生まれて間もない子。(後略)」のことである。「赤帽」は、「鉄道駅で乗客の荷物を運ぶのを職業とする人。赤い帽子をかぶるところからくる。」とされている。この2つの語は、語源が色彩の影響を受けているため、分析の対象とした。

5.2. 現代作品 芥川龍之介

芥川作品では、赤系色彩語のうち、基本色彩語である「赤」が最も用いられていた。赤の特徴として挙げられることは、身体を修飾対象とする点である。次の節で言及する

が、『源氏物語』では身体を修飾するのは赤のみだったが、芥川作品では数量は赤に劣るが、紅も身体を修飾している。近江（2008）は、赤系色彩語は赤と紅に分化していると主張していたが、紅が、時間の経過とともに、身体を修飾できる点も分化の証拠になるのではないかと考える。しかし、紅が身体を修飾している用例の36件中、33件が「毛」と共起している点を鑑みると、紅が修飾できる身体の部位は限定的である。やはり、基本色彩語の赤は幅広い語を修飾できるという特徴を持っている。

次に、芥川作品の場合、赤系色彩語が抽象概念を修飾する用例は存在しなかった。分類の過程上、抽象概念とはしなかったが、「赤帽」のように色が職業を指すようになっていた。

3.4.では、赤系色彩語のコノテーションに、女があると述べた。しかし、上村（1999）によると、芥川作品の特徴として、男性の着物や装身具に赤を用い、ステレオタイプとは異なった用法がある。文学においては、必ずしもコノテーションどおりに、色彩語を用いないことが明らかになった。

今回は対象から外れてしまったが、紅には、真の紅という意味を持つ「深紅」ということばがある。深紅が修飾する対象物は5件存在した。そのうち、4件は、海水着や衣蓋、猿につけた紐など、着物・装身具であり、耳を修飾するものが1件あった。修飾する対象物は紅と変わらない。

次に、朱についてである。『漢字の使い分けときあかし辞典』では、『朱』は、他のものの色と比べて「あか」を目立たせるはたらきをすることが多いと記されている。芥川作品に出現した「朱」の19件のうち、朱と共に他の色彩語が出てきた例が13件あった。内訳は、黒4件、鼠色1件、黄色3件、青1件、白3件、紅1件である。鼠色を黒系色彩語、紅を赤系色彩語と捉えた場合、朱とともに用いられた色彩語は、五行説で用いられる色彩語と同じである点が興味深い。他方、朱のみで用いられた例は6件あり、そのうち2件は、「校正の朱筆」や「朱をいれる」と、朱のみでも表現として成立する用例であった。

赤や紅と比べ、使用頻度が低い語は、丹と緋である。丹は建物に関するものを修飾するときに、緋は服や染色に関わることを指すときに限られて使用されていた。修飾する対象が限定的な色彩語は、使用されづらいことが分かる。なお、漢字表記に限定して分析を行ったためか、茜の用法は見られなかった。

この分析の結果として、赤系色彩語の修飾する対象物が幅広いものから並べると、赤、紅、朱、丹と緋となった。

表8 芥川作品における対象別分析の結果

	身体	着物・装身具	もの	抽象概念	計
赤	153	55	153	0	361
紅	36	5	50	0	91
茜	0	0	0	0	0
丹	0	0	13	0	13
朱	0	0	19	0	19
緋	0	5	1	0	6
計	189	65	236	0	490

5.3. 古典作品 『源氏物語』

『源氏物語』の場合、赤系色彩語によって修飾できる対象が異なることが顕著になった。これは、前述の芥川作品と比較しても如実である。

『源氏物語』で用いられた赤系色彩語は、赤、紅、緋であったが、身体を修飾できるものは、おおむね「赤」であった。この要因として、赤は基本色彩語であるため、他の赤系色彩語よりも、修飾できる対象の範囲が広いことが挙げられる。また、当時、紅は高貴な色であったため、修飾できる語が限られており、身体には用いることができなかったと推測する。なお、紅は、当時のトレンドカラーであったためか、用例の数量では、赤を上回っている。これは、『源氏物語』の特徴である。

伊原（1994）は、平安時代の色の対象は、ほとんどが衣装であったと主張している。しかし、当研究の結果をみると、「着物・装身具」よりも、「もの」に赤系色彩語が用いられている。これは、紅葉や紅梅といった襲の色名を対象としなかったためであろう。さらに、伊原（1994）は、襲の色は四季折々に野山や庭園を彩る自然の彩りを真似た色合いであると述べている。襲の色ではないが、「もの」に分類された81件のうち自然に関するものを修飾している表現は64件であった。したがって、平安時代の人々は、自然の彩りに価値を見出し、衣服やことばで表現しようという意志があったことが伺える。

なお、今回の分析手段では、茜、丹、朱の用法は1件も見られなかった。

表9 『源氏物語』における対象別分析の結果

	身体	着物・装身具	もの	抽象概念	計
赤	28	12	11	0	51
紅	0	13	70	0	83
茜	0	0	0	0	0
丹	0	0	0	0	0
朱	0	0	0	0	0
緋	0	0	1	0	1
計	28	25	82	0	135

6. 英文学における色彩語「あか」

この節では、前節で記した日本文学における赤系色彩語と同様の分析を、英文学でも行う。この分析を行うことで、英文学における色彩語の使い方の特徴が明らかになるだけでなく、日本語の赤系色彩語を比較対照的な視点でみるのが可能になると考えている。

また、Shakespeare 作品を取り上げた理由は、以下の通りである。須賀川（1999）によると、赤系色彩語は中英語期に著しく増加し、Shakespeare 作品が誕生した頃には、多様な赤系色彩語が存在していたと推測できる。また、須賀川（1999）は、Shakespeare 作品に出現する全色彩語の73%は、赤系色彩語であると主張しているため、本論の分析対象に適していると判断した。

6.1. 分析方法

本論における英語の赤系色彩語の分析方法について述べる。この研究の分析対象は、William Shakespeare の戯曲 37 作品である。分析にあたり、アメリカの George Mason University が運営するデータベース、“Open Source Shakespeare” を使用した。また、Henry IV は二部作、Henry VI は三部作であり、部ごとに発行されているが、本論では、作品ごとで1つとして扱うことにした。

色彩表現の分類と抽出基準は、5.1. で記した日本語の色彩表現の分析と同じ方法を適用する。この基準を適用し、分析対象から外れたものは、人物名として用いられている Scarlet である。しかし、Scarlet が登場人物の赤い鼻とのダブルミーニングで用いられた例もあったので、これは分析対象に含めた。また、*Oxford English Dictionary* によ

ると、redには、派生語として、形容詞の reddish や reddy、副詞の redly、名詞の redness があるが、本論の調査対象は、redのみとした。

6.2. Shakespeare 作品

Shakespeare 作品では、赤系色彩語の中で、基本色彩語の red が最も使用されており、修飾の対象も「身体、着物・装身具、もの、抽象概念」と多岐にわたっている。

crimson は、*Oxford English Dictionary* の定義どおり、血に関して使用されていた。しかし、血は、red と共に用いられる場合もある。この red と crimson の使い分けは、赤系色彩語が血のみを修飾するか、「血」と他の対象を修飾するかによってなされていると考察する。Shakespeare 作品は、“and your colour, I warrant you, is as red as rose.” (*Henry IV, Part II, Act II, Scene 4*) のように、1つの色彩語で2つ以上の対象物を修飾するという特徴がある。この特徴が表れている用例を以下に挙げる。

Prick not your finger as you pluck it off,
Lest bleeding you do paint the white rose red
And fall on my side so, against your will.

(*Henry VI, Part I, Act II, Scene 4*)

この部分を松岡（2009）は、以下のように訳している。

摘み取るとき棘で指を突くなよ、
さもないと血が出で白バラを赤く染め、
心ならずとも私の側につくことになる。

(松岡訳、2009、p.71)

この red は、血とバラを修飾するものであり、red rose は、ランカスター家の象徴であり、この戯曲で大きな意味を持つ（4.4.を参照）。また、下記の例も、red が「血」と別の対象物を修飾するものである。

Duke of Gloucester. (中略) What colour is my gown of?
Simpcox. Red, master; red as blood.

(*Henry VI, Part II, Act II, Scene 1*)

この用法では、red は「血」と装身具である gown を修飾していた。これに対して、crimson は、原則、「血」以外のものは修飾しない。他の対象物を直接的に修飾していたとしても、どこかで「血」とつながりがある。その例として、“with murder’s crimson badge” (Henry VI, Part II, Act III, Scene 2) は、「殺人という血の濡れ衣」(松岡訳 2009 p.307) が挙げられる。

scarlet の用法は、衣装の色を表すという語源の通り、robe や cloak を修飾したり、“dyeing scarlet” という表現があったりした。また、赤池 (1981) では、scarlet のコロケーションは、高い地位を示す一方、罪悪を表すと述べている。その見解どおり、hypocrite (偽善者) や sin (罪) と結びついて、使用されていた。なお、vermilion の用例は、見られなかった。福田 (1999) の、西洋の人々は vermilion に特別な執着を持っていなかったという主張の通りであったといえる。

英語の赤系色彩語は、他の色彩語と対に使うということがある。red の場合、顔色を示すとき、red と pale、red と white という組み合わせで使われている例が多数存在する。また、マクベスでは、

(前略) No, this my hand will rather
The multitudinous seas in incarnadine,
Making the green one red.

(*Macbeth*, Act II, Scene 2)

上記のように、green と red を組み合わせて使うこともある。scarlet と crimson も pale と結びつく用例が 1 件ずつ見られた。

英語色彩語の特徴として、日本語の赤系色彩語よりも、抽象概念と結びつきやすいことが挙げられる。例えば、red は plague や murrain、pestilence といった病気を表す語や、dominical という祝日を示すことばを修飾している。scarlet は、上記の通り、hypocrite (偽善者) や sin (罪)、indignation (怒り) と結びついている。また、crimson は、badge (印) や lethe (死の川)、tempest (嵐) と共に使われた。これらの用法は、red のコロケーションである負の意味が反映されていると考えられる。ただし、dominical (祝日) のみ、良い意味で使われている。

表 10 Shakespeare 作品における対象別分析の結果

	身体	着物・装身具	もの	抽象概念	計
red	34	1	21	4	60
scarlet	4	2	2	3	11
vermilion	0	0	0	0	0
crimson	6	0	3	3	12
計	44	3	26	10	83

7. おわりに

以上、日本語と英語の赤系色彩語がどのように使い分けられているのか、色彩語の原料や語源、科学的な数値などの比較と、文学における赤系色彩語の修飾する対象物の分析から明らかになった。

赤系色彩語の成立の仕方は、日本語と英語で異なる。日本語の場合、基本色彩語の「赤」を基盤に、原料の違いから多様な赤系色彩語が成立し、英語色彩語は、既存の研究どおり、基本色彩語 red を中心に、不足している色味を補うように成立している。

文学における赤系色彩語の分析では、日本語と英語の両言語とも、基本色彩語の赤と red が幅広い対象物を修飾でき、数量的にみても他の赤系色彩語よりも多く用いられていた。日本語の場合、基本色彩語の「赤」の特徴として、身体を修飾できることが判明した。『源氏物語』では、身体を修飾するのは赤のみだった。時間の経過とともに、芥川作品では、数量は赤に劣るが、紅も身体を修飾するようになった。他方、英語色彩語では、Shakespeare 作品を分析した。英語には、血を表す crimson という色彩語があるにもかかわらず、red を使う用例が多数見られた。このことから、基本色彩語に対して、他の色彩語は使用できる範囲が狭い。

色彩語の成立はそれぞれの言語で異なり、色彩語が持つ連想的な意味などは、文化に応じて多様に存在する。一方、日英の対照分析を行った結果、基本色彩語が同系色の色彩語よりも幅広い対象物を修飾できる点は、普遍的なものであるといえるだろう。

参考文献

- 赤池鉄士 (1981) 『英語色彩の文化誌』 研究社
 伊原昭 (1994) 『文学にみる日本の色』 朝日新聞社
 上村和美 (1999) 『文学作品にみる色彩語表現 芥川龍之介作品への適用』 暁印書館

- 遠藤敏男 (1971) 『英文学に現われた色彩』 プレス東京
- 近江源太郎 (2008) 『色の名前に心を読む―色名学入門―』 研究社
- 風見明 (1997) 『「色」の文化誌』 工業調査会
- 佐藤武義・前田富祺 編集代表 (2014) 『日本語大事典』 朝倉書店
- 須賀川誠三 (1999) 『英語色彩語の意味と比喩』 成美堂
- 田中春美 編集主幹 (1988) 『現代言語学辞典』 成美堂
- パストゥロー・ミシェル著、石井直志・野崎三郎訳 (1995) 『ヨーロッパの色彩』 パピルス
- 姫野昌子 監修 (2012) 『研究社日本語コロケーション辞典』 研究社
- 福田邦夫 (1999) 『色の名前はどこからきたか―その意味と文化』 青娥書房
- 福田邦夫 (2006) 『色の名前 507―JIS 規格の 269 色を含む日本の色と外国の色由来、おもしろ話からデータまで』 主婦の友社
- 丸山伸彦 編 (2012) 『日本史色彩事典』 吉川弘文館
- 山口さずか (2009) 「色彩に関する言語研究」 『東京女子大学言語文化研究』 18 pp.56-69
- 吉岡幸雄 (2000) 『日本の色辞典』 紫紅社
- Berlin, B. and Kay, P. (1969). *Basic Color Terms*. California: University of California Press.
- Turner, V.W. (2004). *Colour Classification in Ndembu Ritual*. In Banton, M. Editor, *Anthropological Approaches to the Study of Religion*. (pp.47-84). Oxford: Taylor & Francis Group.

参考 URL (電子書籍)

- WEB 色見本「原色大辞典」 <<https://www.colordic.org/>>
- 日本産業標準調査会「JIS Z8102」 <<https://www.jisc.go.jp/app/jis/general/GnrJISNumberNameSearchList?toGnrJISStandardDetailList>>
- 日本産業標準調査会「JIS Z8712」
<<https://www.jisc.go.jp/app/jis/general/GnrJISNumberNameSearchList?toGnrJISStandardDetailList>>
- DIC カラーデザイン株式会社「[マンセル表色系]とは」
<<https://www.dic-color.com/knowledge/munsell.html>>
- EBSCOhost 『漢字の使い分けときあかし辞典』
<<http://web.aebcohost.com.webvpn.cis.twcu.ac.jp/>>
- JapanKnowledge 『角川古語大辞典』 <<http://japanknowledge.com.webvpn.cs.twcu.ac.jp>>
- JapanKnowledge 『新選漢和辞典 web 版』 <<http://japanknowledge.com.webvpn.cs.twcu.ac.jp>>
- JapanKnowledge 『デジタル大辞泉』 <<http://japanknowledge.com.webvpn.cs.twcu.ac.jp>>
- JapanKnowledge 『日本国語大辞典』 <<http://japanknowledge.com.webvpn.cs.twcu.ac.jp>>
- Oxford Collocations Dictionary for Students of English*, second edition 電子版
- Oxford English Dictionary Online <<http://www.oed.com/>>
- 以上、全て 2020 年 11 月 19 日閲覧

参照資料

青空文庫「芥川龍之介」 <<https://www.aozora.gr.jp/>>
古典総合研究所「語彙検索」 <<http://www.genji.co.jp/kensaku.htm>>
全文検索システム『ひまわり』 <<https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php>>
シェイクスピア著, 松岡和子訳『シェイクスピア全集』(全 32 巻) 筑摩書房
Open Source Shakespeare <<https://www.opensourceshakespeare.org/>>

以上、全て 2020 年 11 月 30 日閲覧

Abstract

This article inquires into Japanese and English color terms, focusing on the words for ‘red’ and related color terms as used in Japan and the UK. Six Japanese color terms and four English color terms were selected, and research was done to determine how Japanese and English speakers use those different terms for different purposes.

The results have revealed that Japanese categorization of the color terms in question differs from the way in which English categorizes its color terms. Japanese color terms are based on materials used to create the colors, while English categorization focuses on the differences in color tone. An inquiry was also done to analyze the usage of these terms in Japanese and English literature, classifying the objects described by the color terms into four groups: body-parts, clothes, other physical objects, and abstract notions. The results show that basic color terms ‘aka’ and ‘red’ are used for wider ranges of objects than other color terms.